

☆「医療的ケア児」支援強化 県、新たな施設参入促す たん吸引や経管栄養

茨城新聞 2017年8月6日

http://ibarakinews.jp/news/newsdetail.php?f_jun=15019308773273

＞ 日常的にたん吸引や経管栄養などの医療的ケアが必要な子どもたちの支援強化を狙いに、県は本年度、協議会を発足させるなどして対策に乗り出す。支援の軸となる通所・短期入所施設が不足しているため、県は研修会を開いて新たな施設の参入を促すほか、県庁内に協議会を設けて情報共有を図る。本年度改定される新しいばらき障害者プランや県保健医療計画に「医療的ケア児」に関する記述を盛り込み、支援を加速させる方針。

「こんにちは、きょうもお願いします」。午前9時半、医療的ケア児の支援施設の一つである多機能型児童発達支援所「ぼびい」=水戸市=に子どもを連れた母親らが次々と訪れる。

水戸市の白石るり子さん(50)の長女樹歩さん(18)は2年ほど前から、夏休み期間などを中心に施設を利用している。樹歩さんは運動機能障害と知的障害があり、ほぼ寝たきりの状態。胃に栄養を送る経管栄養のケアを必要とする。るりさんは「家の中だけで見ないといけないと考えた時期もあったが、外の世界に触れられる場所が増えて、子どももうれしそう」と話す。

現在は別の短期入所施設にも通い、樹歩さんを施設に預けている間、るりさんは買い物や自宅の掃除をこなす。「家事などに集中できる貴重な時間」というが、施設の数が少ないことから予約が取れないことも多く、「予約合戦になっている」と指摘する。

■受け入れ施設

県内の重症心身障害児を受け入れる通所支援施設は8市町の12施設、医療型短期入所施設は成人向けを合わせても8市町村の9施設にとどまる。県は本年度、医療的ケア児の支援事業に135万円を予算化した。医療機関に委託して、市町村の担当者や福祉事業者などを対象にした研修会を開く。医療的ケア児に対する理解を深め、新規参入につなげるのが狙い。現在、研修内容などについて調整している。

また、県庁内の関係各部署で連携を図るため、協議会を設ける。保育や教育などの各分野を担当する部署と情報を共有することによって、効果的な対策や対応につなげる。県障害福祉課の担当者は「支援の隙間に入りこんでいる人たちを支援の対象とするなど、新たな対策につながるようにしたい」としている。

■最低1カ所

国は2020年度までに、主に重症心身障害児を受け入れる通所施設を各市町村に少なくとも1カ所以上確保する目標を定めている。県は国の方針や、医療的ケア児の保護者からの声を受けて、通所施設などを必要とする県内の重症心身障害児の数などを、市町村を通じて調べている。

県は本年度、来年度から5年間の医療・福祉の指針となる「新しいばらき障害者プラン」や「県保健医療計画」を改定する予定で、「医療的ケア児」に関する対策を盛り込み、調査結果を対策に反映させる方針。

……などと伝えていきます。

△厚労省：H28年12/13開催された＜平成28年度医療的ケア児の地域支援体制構築に係る担当者合同会議＞

*事前提出資料「取組報告」シート ↓P24～P26 には茨城県作成の資料あり

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000147133.pdf>

☆【記者の目】

ひたちなか、重症児デイ5カ月 交流支援 つながる母親 孤立解消「頼れる場所と人」
茨城新聞 2017年8月6日

http://ibarakinews.jp/news/newsdetail.php?f_jun=15019308773280

＞ 重症心身障害児や医療的ケア児といった「重症児」を預かる重症児デイサービス「kokoro」(ひたちなか市)。母親同士の交流の場を設け、孤立しがちな彼女たちを支援している。家族の地域生活を支援する活動は、いわば重症児デイのもう一つの「顔」。
…などと伝えています。(続きは下記紙面で)

茨城新聞 2017年8月6日

オピニオン

交流支援 つながる母親

ひたちなか 重症児デイ5カ月

重症心身障害児や医療的ケア児といった「重症児」を預かる重症児デイサービス「kokoro」(ひたちなか市)。母親同士の交流の場を設け、孤立しがちな彼女たちを支援している。家族の地域生活を支援する活動は、いわば重症児デイのもう一つの「顔」。開所から5カ月がたった同施設で、母親同士のつながりが生まれている。

(ひたちなか支局・斎藤明成)

■ヨガ

7月19日午前、同施設内に母親たちの笑い声が広がった。インストラクターを講師に迎えたヨガ教室が開かれ、子を預ける母親6人が爽やかな汗を流した。

窓越しに見える機能訓練室では朝の会が開かれ、子どもたちが母親に手を振る光景が見られた。その後、母親たちは昼食を共にし、おしゃべりを楽しんだ。

笠間市の大高優子さん(38)は、長男の悠月君(5)がダウン症で肺疾患を伴う。男の子で栄養を摂る、自宅周辺だと受け入れ先が見つからないため、車で1時間かかる同施設を利用。大高さんは「病院で重症児の親を見掛けるのも友達になるまでの付き合いはなかった」

■遠足

医療的ケア児は自力で生活するのが難しく、母親が付きっきりでのケアを強いられる。一方で受け入れてくれる保育所や既存の施設は少ない。子どもも24時間付きっきりになる母親は、交友関係が狭まり孤立感を深めがちだ。

遠足を機に、母親たちは連絡を取り合うようになり、一緒に昼食に出掛けたり、就学の相談をしたりしている。那珂市の女性(38)は三男(5)が医療的ケア児。三男は来年、特別支援学校に入学するが、女性は「先輩ママに学校のことを聞けるのがいい」と感謝する。

■戦友

同施設を運営する一般社団法人の代表理事、紺野真代さん(39)も3人の子どもが医療的ケア児だ。長男の雅矢君は3年前に13歳で亡くなった。看護師の紺野さんはかつて、家族に子どもを預けることで病院で働くことができた。しかし、家庭の事情でそれも難しくなると途端に子どもの預け先がなくなると、一大決心し、自ら重症児デイを開設した。

同施設が母親同士の交流に力を入れるのは、紺野さん自身の体験が背景にある。紺野さんは「頼れる場所と人が欲しかった」と当時の心境を明かす。そして意義を強調する。

「同じ試練や体験を共有しているから、ママは『戦友』で心強い存在。集まれば、団結が生まれて、ものすごい力になる」

母親同士をつなぐ役割を果たす重症児デイ。資金やスタッフの確保などで設立のハードルは高い。運営も簡単ではない。国は2020年度末までに、各市町村に1カ所以上確保することを目標としている。孤立する母親たちを救うためにも、行政の取り組みが期待される。

孤立解消「頼れる場所と人」



重症児の子どもを預けて、ヨガ教室に参加する母親たち＝ひたちなか市高塚

インサイド
記者の目